Osaka University Knowledge Archive

Title	谷文晁研究 ー大名文化圏における風景愛好趣味との関わりに着目してー
Author(s)	中村, 真菜美
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72437
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　中村真菜美　）	
論文題名	谷文晁研究 －大名文化圏における風景愛好趣味との関わりに着目して－

論文内容の要旨

本稿は、江戸時代後期の画人、谷文晁による風景を題材とした諸作品を中心に、その表現上の特質を明らかにすることを目的とする。同時に、江戸時代後期の大名文化の一特色である「風景愛好趣味」の実態について検証を行い、為政者が風景の絵画化に対してどのような意味を見いだし、画家に何を期待したのかを明らかにすべく、文晁作品に加え、文晁の師・渡辺玄対と文晁の義弟で秋田藩御抱絵師であった菅原洞斎の作例も取り上げる。

第一章では、渡辺玄対筆「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」（明和八年頃、宇土市教育委員会蔵）に焦点をあてた。本作は熊本宇土支藩第五代藩主・細川興文が領地の桂原に構えた隠居所・蕉夢庵を称えるべく、計九名の大名と文人が漢詩を寄せ、玄対が「蕉夢庵図」と「十五景図」を描いた。江戸時代中期の大名文化における風景の絵画化の様相を伝え、中国園林文化受容や、領地巡覧と絵画制作の関わりといった、第二章以降に論じる江戸時代後期の作例を検討する上でも重要な論点を提起する作品である。まずは題跋や題詩といった基本情報を確認し、興文も属した服部南郭や高野蘭亭を中心とする古文辞学の交友圏が根底にあることを指摘した。さらに本作が構成および作画様式において、明代蘇州で制作された別業図の影響下にあることを検証した。ただし「蕉夢庵図」のもつ現実性への志向は中国の園林画よりも池大雅「楡枋園図巻」（大徳寺蔵、安永元年頃）に最も近似しており、明和末から安永初期にかけて中国の園林画を日本の現実に合わせて再構成しようとする動きがおこっていたと考えられる。さらに玄対は蕉夢庵を理想空間として演出することも試みており、「蕉夢庵図」の特徴的な楕円形を意識した構図は、王維の邸宅を描く「輞川図」に淵源が求められる。最後に付属する跋文の分析を行い、制作の背景に興文の領内巡覧があった可能性を提示した。また跋文中の「圖其風土思其民事、豈非仁厚愍恤之至邪」という文言に注目し、領内の風景を絵画化し、民を思うことは、藩主が持つべき慈悲深い心に通ずるという考え方が作品制作の根底にあると指摘した。「十五景図」に様々な民の姿が現れるなど、本作には興文の為政者としての意識が反映されていると考えられる。

第二章では、谷文晁筆「公余探勝図」（東京国立博物館蔵）を取り上げた。寛政五年、松平定信はロシアの進出といった海防問題に対処すべく、伊豆・相模で巡見を実施し、随行した文晁に途次の風景を描かせた。その所産である本作は、西洋由来の遠近法や陰影法を用いた迫真的な景観描写を特徴とする。制作目的については、海防巡見という特殊な制作背景を踏まえ、本作を定信の海防政策に付随した実用的な記録とみなす説が提起されている。一方で、紀行文学の興隆や史跡への関心の高まりといった同時代の文化的動向に着目した指摘もある。本章では、こうした先学の見解に対し、以下二点の新しい解釈を提示した。第一に、「公余探勝図」における西洋から舶載された銅版画の影響を考察した。先行研究では、本作の遠近法や陰影法に、秋田蘭画や司馬江漢の作品など日本人画家による洋風画からの影響が指摘されるも、西洋からの直接的な影響については具体的な考察が行われてこなかった。しかし、文晁が西洋の景観表現を直接学び得たか否かは、本作の制作目的を考える上でも重要な問題である。同時期の洋風画と比較すると、本作のほうが前景から遠景まで空間に連続性のある自然な景観表現に成功している。さらに、第二十三図から第二十五図の［下田港］は、ファレンティン著『新旧東インド誌』やヨハン・ニューホフ著『東西海陸紀行』など舶載地誌に頻出する港や島を海上から捉えた銅版画と様式的に類似することが指摘できる。作品全体に通ずる精緻で硬い筆致が銅版画を彷彿させることからも、本作制作に際し、文晁は舶載銅版画を通じ、西洋の景観表現を直接学習したと想定される。その理由として定信が、舶載地誌の景観表現を軍事的に有用であると考え、文晁に習得を求めた可能性が考えられる。第二に、定信自ら巡見を指揮したという事実が作品制作に与えた影響を検討した。これまであまり注目されてこなかった画中のモティーフの分析を通じ、本作は定信個人の巡見体験を記録することを重視し、定信の記憶と関わる「旅日記」としての側面を有していたと指摘した。本作において、文晁は天候の移り変わりを表現するが、巡見期間に各地で綴られた日記文献から、実際に体験したとおり天候を表現したことを証明した。また第五図［藤澤寺境内望富士山］に定信命名の茶室を描いたり、第三十四図［石廊崎］などに巡見中に目にした動植物を

極めて小さく描きこんだりと、鑑賞者として想定される定信自身の旅の記憶を呼び覚ます工夫を試みたと指摘できる。

第三章では、熊本藩第八代藩主・細川斉茲の命で制作された文晁中年期の大作「東海道勝景」（文化五年頃、永青文庫蔵）に注目した。まず、「東海道勝景」と「公余探勝図」の比較を通じ、「東海道勝景」において文晁が、これまでの筆法と彩色のあり方を大きく変え、光の表現を試行していること、風俗や人物の描写に強い関心を示すことを明らかにした。次いで、文晁の新しい画風形成に関し、東西画壇の同時代的交流という新見地から検討を試みた。寛政期に上京した文晁が現地の画人と密接に交流した事実を確認し、さらに円山応挙周辺で制作された日本風景を題材とする作品と、描法および光や大気の表現に対する関心に類似を指摘することで、「東海道勝景」は文晁の円山派学習の成果であると見なした。また、原在正筆「富士山図巻」（寛政八年頃、個人蔵）に着目し、文晁と同時代の京都画壇の影響関係が双方向性を有していたという結論を導いた。最後に、「東海道勝景」に注文主、細川斉茲の意向がいかに反映されたのかについて分析を進めた。斉茲下命による風景作品「領内名勝図巻」（寛政五年、永青文庫蔵）の制作が大名たちの社交の場での披露を意図するものであったことから、それに匹敵する大きさの「東海道勝景」も同様の目的から発注された可能性を提起した。文晁の縮図帖に「領内名勝図巻」に関する記述を見いだし、文晁がこの先行作の存在を認識していたことも示した。また第一章で論じた「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」の作者が文晁の師であり、発注者が興文の父であるという点から、「東海道勝景」との比較を試みた。両作品には勤勉に働く民の姿が現れ、興文・斉茲父子は民を慈しむ藩主であることを対外的に示そうとする意識を共有していたと結論づけた。文晁は斉茲の意向を汲み、鑑賞性を高めることを第一義とし、多様な画中人物を入れ込むことで、民が幸せに暮らす光の満ちた風景を作り出したと考えられる。さらに文晁が定信の家臣であったという事実に立ち返り、当時の政局を踏まえ、「東海道勝景」は斉茲と文晁の主君松平定信との融和関係の証とでもいうべき作品であったと総括した。

第四章では、文晁の庭園画の中でも最初期作にあたる「浴恩園図記」（天理大学附属天理図書館蔵）を取り上げた。本作は松平定信が江戸築地に築いた居宅庭園「浴恩園」を題材とし、儒学者・柴野栗山と白河藩儒・広瀬蒙斎が園記をあらわし、文晁が蒙斎の園記に沿って全十七図を描いた。先行研究では、文晁が本作制作に「公余探勝図」の画面構成を応用したことや、江戸狩野派や中国文人画家の「庭園画」を踏まえたことが指摘されている。一方で本作の成立過程や制作目的については未だ具体的な検討が行われていない。そこで、まずは蒙斎の園記が制作された寛政七年における文晁の動向に注目し、作画時期について寛政七年十月以降から寛政八年五月までの間と推定した。さらに現状の構成内容になるまでに複数回の改装が施された可能性を提示した。次に合装される栗山と蒙斎の園記も読み解きながら、作画内容を分析し、「浴恩園図記」の制作意図を考察した。各図の画中モティーフの解釈を中心に進め、定信と将軍家斉の関係を示唆する図や、定信が老中在任中に最も力を入れた施策を彷彿とさせる図の存在を指摘した。そして文晁には先に成立していた栗山と蒙斎の園記とともに、浴恩園の景観を通じて定信の人格と政治家としての理念を表現することを課せられていたと結論づけた。加えて第三図に文晁が園記には言及のない漁夫と遊覧する人物を描くことを見いだし、それらが「漁隠」と「共楽」という二つの理念の象徴であると解釈した。園記の内容に制約される中でも、文晁は創意を加え、浴恩園のあるべき姿を追究したことが窺える。最後に制作目的について、寛政五年七月の定信の老中退任との関わりに着目して論じた。近年、定信を取り巻く政局に関して研究が進展し、老中退任の実情が更迭であったことや、定信が改革の正統性を誇示するために時に事実を歪曲し、自らのイメージ補正に努めていたことなどが実証されてきた。こうした諸研究を踏まえれば、露骨なまでに定信賛美をする本作の存在もまたイメージ戦略の一環であったと想定される。本作の制作当時、定信は老中職を退くも、白河藩主として、反発を強めていた家臣団と向き合い、藩政を行わねばならない立場にあった。定信は浴恩園そのものに供侍や藩士、その妻子を招き、遊覧させるという懐柔策をとっていたが、本作も同様に、実際に浴恩園を訪れられない在国家臣などに、庭園を疑似体験させ、定信の「名君」としての姿を印象づける装置として期待されていた可能性が浮上する。

第五章では、屋代弘賢文・菅原洞斎画「衆楽園図」（文化四年頃、千秋文庫）に注目し、文晁の庭園画が同時代に与えた影響を考察した。本作は秋田藩が江戸城北・新堀村に有した抱屋敷の庭園・衆楽園を題材とし、弘賢が和文と和歌をしたため、洞斎が園内二十景を描いた。まず、制作目的について、衆楽園の「名園」化と衆楽園の主・佐竹義和の「名君」化が目指されていたと指摘した。本作において、洞斎の描く庭園の優美な姿から義和の文雅を示唆するとともに、弘賢が秋田藩の函館出兵という時事、園内の武器庫や火薬庫、そこで働く人々の姿に言及することで、義和の善政や武士としての勇壮な姿を表出しようとしていたことを見いだした。そして「衆楽園図」の画面構成に、文晁が手掛けた「青山園荘図稿」や「戸山山荘図稿」（両作とも出光美術館蔵）との類似を見いだし、また善政賛美という点において第四章で取り上げた「浴恩園図記」と方向性を同じくすることを示した。義和が定信を自らの改革政治の規範として見なしていたという先学の指摘も鑑みれば、定信と近しい大名の間で、「名君化の装置としての庭園画」というコンセプトも共有され、大名庭園の絵画化が進められていった可能性が考えられる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　中村真菜美　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	橋爪節也
	副 査	大阪大学　教授	藤岡　穣
	副 査	大阪大学　名誉教授	奥平俊六

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　谷文晁研究ー大名文化圏における風景愛好趣味との関わりに着目してー

学位申請者　中村真菜美

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　橋爪節也

副査　大阪大学教授　　藤岡　穣

副査　大阪大学名誉教授　奥平俊六

【論文内容の要旨】

本論攷は、江戸後期の画人谷文晁の画風形成や様式の変遷を作品に検証するとともに、大名文化圏で盛んな「風景愛好趣味」を踏まえ、為政者が風景の絵画化にどのような意味を見いだし、画家に何を期待したか言及する。全五章のうち第一章から第三章は『美術史』『フィロカリア』など学術雑誌や記念論集に掲載され、第五章は『待兼山論叢』の掲載が予定されている。第四章が新しく加えられた。

第一章は、文晁の師である渡辺玄対が宇土藩主・細川興文の蕉夢庵を描いた「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」（宇土市教育委員会蔵）をとりあげ、大名文化圏における風景の絵画化と中国園林文化の受容、領地巡覧との関わりなどの問題を提起する。題跋題詩に古文辞学派との関係を指摘するとともに、画面構成や絵画様式において「輞川図」を淵源として、明代蘇州で制作された別業図の影響下にあることを検証するほか、制作動機に藩主による巡覧の可能性を提示し、絵画制作への為政者の意識を考察する。

第二章は、老中松平定信の伊豆・相模巡見時に文晁が描いた「公余探勝図」（東京国立博物館蔵）を取り上げる。本図は、これまで定信の海防政策に付随した実用的な記録とされる一方、同時代における紀行文学の興隆や史跡への関心の高まりも指摘されてきた。著者はそれを踏まえながら二つの新解釈を提示して検証を試みる。一つは、ファレンティン著『新旧東インド誌』やヨハン・ニューホフ著『東西海陸紀行』に掲載された銅版画との類似性で、文晁が西洋の景観表現を学習したことを明らかとする。もう一点は、モティーフ分析を通じ、本図が個人的な巡見体験を記録した、定信本人の記憶と関わる「旅日記」としての側面の指摘である。

第三章では、熊本藩主・細川斉茲の命で制作された「東海道勝景」（永青文庫蔵）と「公余探勝図」を比較し、本図制作が文晁の画風転換の契機となったことを指摘する。本図で文晁は筆法や賦彩を変え、光の表現を試行したり、風俗や人物の描写に強い関心を示した。また、円山応挙周辺との描法や光や大気表現の類似性を指摘し、本図を寛政期に上京した文晁の円山派学習の成果と見なす一方、原派など同時代の京都画壇と文晁との影響関係を指摘する。加えて本図に、細川斉茲が大名の社交の場での披露を意図した発注である可能性があることを提起するとともに、「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」同様に民を慈しむ藩主のイメージ形成の目的があることを指摘する。

第四章では、松平定信の居宅庭園を文晁が描いた「浴恩園図記」（天理大学附属天理図書館蔵）を取り上げ、寛

政七年十月から寛政八年五月までの制作と推定し、合装された園記にその制作意図を考察する。モチーフから「隠」「共楽」など中国古典の絵画化を見出し、景観を通じて定信の人格と政治家としての理念が表現されていると評した。また近年の定信研究を踏まえ、家臣に庭園を疑似体験させて「名君」として印象づけることが期待されていた可能性も示唆する。第五章では、屋代弘賢文・菅原洞斎画「衆楽園図」（千秋文庫蔵）に注目し、文晁の庭園画が同時代に与えた影響を考察する。

【論文審査の結果の要旨】

公刊、並びに公刊予定の論攷（第一～三章、第五章）に関しては、作品調査や現地踏査に加え、文献資料を渉猟した綿密な考証がなされ、先行研究を踏まえながらも斬新なアプローチを試みて新知見に富んでいる。テーマを絞り込んだ題目の方が適切ではないかとも思われる面があるが、全体としては、幅広い視野から谷文晁と大名文化、江戸後期の絵画史との関係を論じて充実した内容である。

特に評価すべきは、第一章では「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」と池大雅「楡枋園図巻」（大徳寺蔵）との近似性を指摘し、中国の園林画を日本の現実に合わせて再構成する明和安永期の傾向を探ったことと、絵画制作に為政者の意識の反映を指摘したことである。第二章では、「公余探勝図」における西洋絵画の影響と「旅日記」としての性格を具体的に実証したものとして評価できる。特に画中に描かれた天候を在方の日記や記録と突き合わせて確認し、文晁が巡見中の天候を忠実に記録、表現したことを証明したほか、藤澤寺の茶室や石廊崎で目撃した珍しい動植物を描きこむことに、定信の旅の記憶を呼び覚ます工夫があることを指摘した点が新知見に富む。第三章では、「東海道勝景」制作における依頼主の意図の指摘だけではなく、同時代の京都画壇の影響関係の双方向性を指摘したことが新知見である。第四章については、画中の鳥居や鹿などが具体的に何を描いたかなど未解決であったが、論文審査の過程で発見もあり、緻密な論攷へと精製されることが期待できる。第五章では、定信と周辺大名の間で「名君化の装置としての庭園画」というコンセプトが共有され、大名庭園の絵画化が進められた可能性を提起したことが、この分野での研究の方向性を示したものとして評価できる。

以上により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。